熱陽五鈴遺響　鈴鹿郡

十一

和書門
類
二九〇一九
號
函
架
四〇
冊

内閣文庫
和書
類
二九〇一九
號
四〇
冊
一七二函
三四
架

内閣文庫
番號　和　29019
冊數　40（11）
函號　172　310

内一〇七二五號

閣21

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

内一〇七二五號

勢陽五鈴遺響鈴鹿郡卷之上

鈴鹿郡

鈴鹿ノ名義ハ舊典ニ據ナシ林羅山本朝神社考云天智帝禪於位皇太弟大海人皇子有清見原宮皇子大友天智帝之子發兵襲清見原宮即逃入吉野山嶺之踰伊賀国入鈴鹿山闇夜迷路遥見火光列一柴庵老翁嫗在焉大弟就以僦宿問云何故住深山翁答云此處非凡境熟見云此人必有王氣我有一女其相亦貴因令看之大弟幸之於是告云吾是實八淨見原皇子也暫ノ避皇子大友之乱至之于此翁跪曰天照大神寔伊勢国五十鈴河上君今其後裔也宜

往所祈為神宮去此不遠因今翁倶請會大雨鈴
鹿河漲不得渡忽ニ鹿来遇乃乘鹿而渡故改号
云會鹿河云云○源平盛衰記巻十四云天智崩
御後皇子大友位ニ淺ヲ玉ヒヌルヿヲ恨テ謀叛
ヲ起シ淨見原宮ヲ裏玉ヒシカハ宮都ヲ出テ
吉野山ニ入玉フ云云彼山ヲ出玉ヒテ伊賀国
ニ越伊勢近江ノ界ナル鈴鹿山ニ入玉フ深山
陰幽ニメ人跡絶更闌夜暗メ月照サリケレハ
東西ニ迷玉ヒ為方ヲ失ヘリ前後左右ヲ見玉
ヘハ山中幽ニ火ノ光アリ彼ニタトリ行テ御
覧スレハ奇キ柴ノ庵ニ夫婦ト思シクテ老翁
老嫗アリ御宿ヲ借リ玉ヘハ惜マス請シ入奉

ル宮問テ曰在所是多シ何意有テ此深山ニ棲
ムト翁答云此ハ昊地ニメ凡境ニ非ス此ニ棲
ム者三ニ肩ヲ並ヘル地形アリ故ニ此ニ栖ト
シ侍ルト淨見原宮奇異ノ思ヲナシ玉フ玉ニ
肩ヲ並ルトハ朕カヿヲ示スニヤト憑モシク
思食テ重テ汝子アリヤト御尋有ケレハ吾ニ
人ノ女子アリ后ノ相ヲ見セル故ニ凡人ニ隠
メ此山ノ上ニ御所ヲ造リテ居ヘ置侍ルト宮
ノ仰ニ云吾ハ是淨見原宮ナリ天智ノ讓リヲ
得タレヒ天友ノ王子ノ為ニ裏ハレテ此ニ迷
セ来レリ汝カ女カ后ニ可祝トテ即其夜中ニ
彼御所ニ入玉フ云云翁畏リテ申ス君ノ御先

祖ト申ス天照大神ヨリ程近キ伊勢国度會五十鈴川上ニ崇レ玉テ御子孫ヲ守護シ奉ラン
ト御誓ヨリ御参リアリ祈念有ハ御恙モアラ
シト申ケレハ老翁ヲ名具メ御助詣アリ折節
降雨車軸ヲ下メ鈴鹿河ニ洪水漲リ下テ渡リ
難アリケルニ二頭ノ鹿参リテ両人ヲ背ニ乗
セ河ヲ渡シ奉ルソレヨリ彼河ヲ會鹿河ト改
名セリ云云今考ニ上件神社考ノ説ハ源平盛
衰記ヲ本拠トメ記タルナリ會鹿ト云トキハ
鈴ノ義更ニナシ旧ト鈴鹿ト称セシヲ天武潛
幸ノ時鹿ニ遇シヨリ會鹿河ト改メタリト云
フハ似タリ然レハ阿比鹿ニ称スヘシ或云天
皇ヲ荷負シニ鹿来テケルニ驛路鈴ヲ着テ河
ヲ渡セシヨリ鈴鹿ノ名起レリト云如クハ牽
強附會ノ言ナリ古事記改日本書紀前説ナシ
日本天武紀遺大分ノ君恵尺大伴ノ志摩於テ
留守司高坂王而令乞驛鈴　天皇行駕ノ東国
ニ到ラントスレトモ伊賀道路ヲ塞シヲ
慮テ駅鈴ヲ乞玉フ云ヘルヲハナシ此文ニ拠テ鈴ヲ牽合シタルナ
リ盛衰記ノ小説モ此等ノ俗傳ニ拠テ挙タル
ナルヘシ倭姫命世記ニ川俣跡ノ造祖大比古
命参相支汝国名ハ何ト問賜白久味酒鈴鹿国
奈具波志忍山ト白支既ニ天武ヨリ以前垂仁

天皇ノ朝ニ天照太神鎮座ノ時ニ此名アリ然
レハ天武ノ會鹿ニ改玉ヘルト云中ハ過鹿河
ヒ云ヘキニ今古鈴鹿ト不変ノ名ヲ帯ルハ怪
ムヘシ是ニ拠テ此ヲ憶フ味酒鈴鹿ノ枕甚舊
シ倭姫命世記抄云味酒ハウマ酒ノ丁ナリ俗
ニアマサケト云万葉ニ醴酒トアリ錫ハ酒ヲ
入ル物ナレハ味酒ノ三輪ヌ、ルトルノ字ヲ略メ
スヾト濁レルナリト叙ス錫鉱等ハ後ノモノ
ニメ器ニ作ルハ稲後ノ世ノ製造ナリ又嚙ル
トモ略訪信難シ各臆断ナリ或甜酒鈴鹿ヒ
云ヘリ味酒ノ三輪ノ例ニ倣トイヘヒタンザ
ケト訓ルハ意義アリ日本書紀巻二神吾田鹿
葦姫以定田号曰狭名田亦其田稲釀天醇酒嘗
之又用渟浪田稲為稲嘗之和名抄醇酒音罩一
音湛日本私記甜酒多無佐介今方俗今古ノ妄
説ヲ参ク脱メ此ニ解ス甜酒鈴鹿タンザケト
訓スヘシタンハ谷タニノ轉ナリ サケハ裂
ナリ山谷ノ破裂メ河流ヲ出ス義ニメ鈴ノロ
ハ裂タルカ故ニ鈴ニイヒカケタルニメカハ
助字ナリ折鈴五十鈴ノ例ノ如シ故ニむ一鷹
之鈴鹿或鈴ノ郡ト一字ニテ哥ニモ詠リ鹿ハ
今ノ如ク地名ハニ字ニ填ル故ニ鈴ニ鹿ヲ加
ヘタルナリ鹿ハ假字ニメ上件ノ説ニ惑ヘカ
ラス鈴鹿山及鈴鹿川ハ郡名ニ拠テ名ク処ナ

り勢陽雜記以下各及源平盛衰記及神社考ノ
妄傳ヲ働テ鈴鹿ヲ證トスルハ皆謬ナリ
○順和名鈔第五　鈴鹿郡鈴鹿須々加国府英
太阿安加多高宮多加美也長世奈加世牧田比
良多　今考ニ英多ハ縣ノ訓ニメ河嵜村縣主
神社ノ地ナリ志波加支神社ノ條ニ挙タリ高
宮高宮村アリ長世後長瀬ニ作リ今廣瀬ニ轉
セリ牧田ハ今平田村ヨリ鈴鹿ハ亀山ヨリ関
驛ニ至リ総テ称ス国府ハ今国府村アリ伊勢
別雜記拾遺及勢陽俚諺ニ神戸駅家ノ二郷ヲ
加フ然レ𪜈和名抄ニ不載後世ノ私称ニ神戸
郷アリ驛家ハナシ妄ナリ○本郡封彊ハ本郡
東西四里南北二里東ハ河曲郡ヲ限リ西ハ近
江国犬上郡ヲ限リ南ハ菴藝郡郷ヲ限リ北ハ三
重郡ヲ限リ本郡大河久保村ヨリ近江国甲賀
郡太河原村ニ至ル山路二里半大河原越ト称
ス本郡小岐須村ヨリ近江国甲賀郡鮎川村ニ
至ル三里鮎河越ト称ス石神社ノ前ヨリ踰ル
本郡池山村ヨリ近江国甲賀郡安原村ニ至ル
一里五丁安樂越ト称ス國境ヨリ安原ニ至ル
十四丁三十間牛馬不通同郡黒川村ニ至ル三
里本郡坂下村ヨリ近江国甲賀郡山中村ニ至
ル半里同土山駅ニ至ル二里半東街道ナリ本
郡加太村北在家ヨリ伊賀國国花村ヘ至ル一

里十町同柘植村ニ至ル二里山路十リ○村邑
文禄三年検地　七十六村　明暦中勢陽雑
記所載八十七村小邑十一合九十八村　正
保二年所検　百三村　元禄十三年所検
九十三村　今所検八十二村小邑廿九合百
廿一村　外無里ニ處　城町一処　○正
税文禄三年検地四万九千百廿六石一斗三升
伊勢名所拾遺所載四万九千廿石一斗三升
大同小異　勢陽雑記所載五万四千四百四十四石
六斗一升九合　内三万七千八百四十石一斗
八升六合田一万三千六百四石四斗三升三合
畠外五千百八十六石九斗七合新田　元禄

十三年所検五万二千六百十八石三斗九升二
合○東街道東師ヨリ関東ニ至ル通衢官道近
江国甲賀郡ヨリ本加鈴鹿郡ニ渉リ三重朝明
奈名郡ヲ経テ東国ニ至ルナリ上世東海道ニ
鎮撫使ヲ下サルヿハ崇神天皇十年武停川別
命ニ詔ノ将軍ノ名ヲ賜ヒ東国ヲ征シ玉フニ
及テ東海道ノ名始テ起レリ崇神紀ニ見出タ
リ同四十八年夏豊城命ニ東国ヲ平治スヘキ
ノ詔アリ又景行天皇五十六年秋御諸別王命
ヲ以テ東国ヲ領セシメラル是鎮撫使ノ始ナリ
各日本書紀ニ載タリ此後天武天皇直廣肆都
努朝臣牛餌為東海使者各判官一人史一人巡

察国司郡司及百姓之消息云云聖武天皇十八年中納言豊成ニ詔リ鎮撫使トス崇神景行天武ノ朝ハ大倭都ヨリ伊賀国ニ至リ本州一志鈴鹿郡ヲ歴テ東国ニ至ル了今ノ近江ヨリノ官道ニアラス各国史ノ閲メ知ヘシ今ノ官道鈴鹿関驛ニ至ルハ光孝天皇旧路ハ仁和三年ニ新道ヲ開カレシヨリ始トス此時伊賀ヨリ通ス路ハ停ラルトイヘリ其以前ハ崇神天皇六十四年天照大神大倭宇多篠幡宮ヨリ伊賀国隠市守宮同穴穂宮同柘植敢津美憲宮ヨリ既ニ本朋ニ迂幸本郡奈久波志忍山宮ニ至リマス是順次ナリ大倭国ヨリ伊賀及本朋ノ路トスヘシ天武天皇東国ノ行駕ノ時伊賀柘植ノ山中ヨリ鹿伏兎ニ至リ鈴鹿川ヲ踰テ三重朝明郡名郡ヲ歴テ美濃国ニ至リシ潛幸ノ地ナリ是大倭吉野宮ヨリノ旧路ナリ又壽永中西海ノ役ニ源義経山城国宇治及西海ニ到ルモ東国ヨリ本朋ヲ経テ此間道ヨリ伊賀ニ踰テ山城ニ出タルナリ慶長七年東照神君ノ駿府城ヨリ伏見城ニ到ラセラルモ此道ヲ経玉ヘリ上件ノ二事ハ既ニ今ノ官道近津国ニ至ル処アリトイヘトモ宇治勢田及山城伏見ニ至ルノ通キ捷経ヲ以テ経玉ヘリト憶フヘシ今考ニ古昔山城大倭ヨリ伊賀国名張郡及柘

植鹿伏兎ノ北ヲ経テ鈴鹿三箇山ノ南ヲ長峯
トゝヨ踰テ今ノ鈴鹿権現ノ社域ノ南ヲ細径
ヲ経テ二丁許麓ニ出坂下驛ノ後ニ至リ鈴鹿
川ノ流ニ従ヒテ今ノ関駅ノ南ニ通シ東国ニ
到リタルナリ是ヲ古道ト俗ニ称ス旧ト八古ノ中
道トイヘリ俗傳ニ鎌倉将軍源頼朝上洛ノ時
此街道ヲ経ラルトゝ云ハ非ナリ東鑑第十建久
元年十月條ニ廿七日戊申令奉幣熱田社給フ
廿八日己酉及晩著御于美濃国墨俣廿九日庚
戌於青波加宿被召出長者大炊息女等有經仗
今案ルニ尾張熱田ヨリ美濃近江ヲ歴テ上洛
アリシナリ是東国ヨリ京ニ至ル此時ノ古海
道ナリ元暦中西海役ニ蒲冠者範頼軍将トメ
上洛アリケルモ尾張ヨリ美濃近江ヲ経テ上
洛ナリ詳ニ源平盛衰記ニ見エタリ一説日本
武命及頼朝上洛ノ時ハ近江国猪ノ鼻ヨリア
ケビ越トゝ云山路ニ入テ本郡坂本上野横石長
澤野田ヨリ鹿間小松泉女ヲ経テ今ノ京名ニ
至リ東国ニ往来セリ又南小松ヨリ古市場三
重郡小古曽村ニ至ル路アリ前ニ云古ノ中道
トゝ云ハ非ナリ前條ニ古海道ヲ廃ノ今ノ近江
国甲賀郡土山駅ヨリ鈴鹿郡坂下駅ニ至ル東
街道ハ光孝天皇仁和二年ニ始テ闢ラレタル
義ハ三代實録四十九卷仁和二年六月廿一日

し已伊勢斉内親王忘取近江国ノ親道入大神
宮仍テ下知伊勢国又停伊賀国旧路頻宮下知
伊賀国云云是ヨリ前同五月十五日癸巳條勅
遣左衛門権佐従五位下源朝臣昇六位身人検
近江国新通阿須波道之利害ト載タリ此御世
ニ始テ闢タルナリ斉宮家集鈴鹿山
ふるさと中道君もきてなれこそたくれるくれ
是古中道ト云證ナリ

○近江伊勢国界ハ旧ト鈴鹿山ノ嶺ニ堀切川
アリ今国界トス是仁和中ニ所定ナリ今ハ夏
享年中近江国甲賀郡山中村ノ東沢村ニ両国
ノ界標木ヲ建タリ坂下駅ヨリ半里又上世ハ

鈴鹿山ノ嶺ニアリ應永十二年ノ洪水ニ山頽
ル水落壹メヨリ今ノ処ヲ堀トスト片山神社
ノ社司ノ傳ナリ鈴鹿郡賦ニモモイヘリ

鈴鹿山 旧名片山或三箇山方俗ミッヨ山ト称
又東街官道ヲ挾シテ三峯崔嵬深谷幽渓峻岨
ニメ南北ニ聳タリ土俗八百八谷アリトヲ官
道ノ坂路廿六町路嶮ニメ樹木陰鬱トメ屈曲
スルヿ羊腸ニ似リ且ハ嶮ナル処八町許廿七
曲アリ街道第ニノ嶮難ノ処ナリ相摸国箱根
山ニ伯中又ヘシ林春齊癸未紀行勢刀鈴鹿鎖
関衆九折八町嵒徑斜秋色嵐光多感慨護花聲
裡却啣花註云鈴鹿坂羊腸四百八十間土人謂

之八町此坂路ヲ多津加美坂或ハ加ト屋坂ト
云旧名ナリ夫木集覧人丸
秋なれやたなびき雲の絶間より
カトヤ坂古今六帖ニ見ユタリ○三箇島ノ名
ハ今三峯並ヒ峭テ空ヲ凌ケリ故美都吳山ト
名ク或片山神社三神鎮座ノ地ナル故ニ三神
山ト云東洋海ヲ運漕スル舩人ハ此峯ノ雲ノ
タヽスマヒヲ観察メ天時晴晦ヲ占フト云ヘ
リ三箇山ノ称ハ東鑑第十一建久二年正月廿
三日壬申女房大進局ハ浴恩澤是伊達常陸入道
念西カ息女幕下ノ御寵也奉生若公之後論露
顕御臺所殊怨思給之間可令在京之由内々被
仰含仍テ就近国便宜被宛伊勢国欲同建久三
年十二月十日戊申女房大進局先日拜領伊勢
国三箇山事依被申子細重被遣政所下御文民
部烝行政 因幡前司 奉行之三箇山ハ旧常陸三
郎カ領ナリ 同第六文治三年四月廿九日丙
申三日公郷勅使驛家ノ雜事伊勢ノ国地頭御
家人等多ク對捍スル之間召在廳等注進狀被
下之仍今日二品覧彼目録仰不法之輩可被誡
向後懈緩之及嚴密御沙汰件ノ目録云三箇山
常陸三郎云云此後高野貞暁法師ノ領ナリ同
第廿八寛喜三年六月廿二日條高野法師貞暁
去二月廿二日被入滅訖其遺跡被奉讓補内府

實氏公若公由相副文晉等被申送武別之間彼
領掌任譲狀不可有相違之旨今日有評定被成
御下知是備中国多氣巨勢ノ西庄和泉国長泉
ノ庄伊勢国三箇山山田ノ庄等ナリ　原本寛
永刊板東鑑三箇山サンカ山ト訓ス本州ニ今
三ケ山ト云ハナシ訓点ノ誤ナルヘシ或ハミ
ツ子山ト今俗謂フ処ハ三箇山ノ轉ニ憶ヘリ
土俗ノ説ニ三箇山ニ相並フ臼杵ケ嶽ト云ア
リ時トメ鼓声ノ鳴動スルヿアリ古昔ヨリ然
リ旱魃ニ雩スルニ牛馬骨等ノ穢悪ノ物ヲ火
ニ然スヿ中ハ必雨ヲ降スト云或ハウスキ子カ
岳ノ名ニ拠テ穀物ヲ舂ク音ニ聞ユ故名タト

云ヘリ新古今西行詞書いせまいりたる付
よめる
洛原山うき世をとをるまつ松ゆゑ我身なるとも
家集詞書世をのがれていせのかたへまゐ
くとて洛原山さしてよめるトアリ
洛原山ひまやつひの関神〻いくかのうちぬさとの
後撰集讀人しらず
ちはやぶるかみもまつらぬ名のみ哉洛原山を立ぬ
とて
載ぬてふ名をなつかしく洛原山いくまちかくなるぬ思ひを
仝女ゆりはるまきもとめてふるうよ洛原山
とて
是正朝臣

滝原山いせとのあはのすて家恨かなるらと人はいふらむ

金葉集

神無月ちるもの葉はかるまもなくいろ〳〵なる滝原山の郡

千載集

ゆるぎなる誘なえぬれる滝原山言おろせ関はすてかなる色

拾遺　齊宮女御田融院乃御時齊宮のくたり

けはふ冊の前斎宮をろをあそ行りて

世をはなれまくもあえるる滝原山ひとしの今なるやをらむ

仝集詞書　天暦十一年九月十五日斎宮よくた

りなる内ゝ及てゝ〳〵て詠つすとして詠製

杉の原なるなる以なる滝原山あえて姉〳〵きさらひなきき

新勅撰　有家

秋ちるゝ葉のなるゝしを滝原山ちるもあるゝ降ぬひ川

續拾遺　小辨

ふりたてゝかゝ地なる滝原山袖なる人なる嘉ぬ袖ぬゝを

玉葉　小馬命婦

数なる数方いゝ〳〵爲の滝原山をぬを行のをとはせ

續千歳　雅有

滝原山ゆゝ〳〵ちる紀天の戸とゆゝ〳〵なる郡

風雅集　能宣朝臣

下ゝ紅ふいゝ〳〵なる滝原山〳〵の色のいゝ〳〵れかなし

新千載　藤原朝村

滝原山今関あえて杉の原あゝなるもなる千も神るいの〳〵む

仝集　院御製

[illegible]

新拾遺　荒木田氏忠

[illegible]

新六帖　爲家

[illegible]

拾遺愚草　定家

秋の来て[illegible]

拾玉集　慈鎮

[illegible]

家集　齊宮女御

[illegible]

俊頼家集

[illegible]

夫木　詞書いせる　[illegible]

りて[illegible]る人の[illegible]

御集　後鳥羽院

[illegible]

御集　順德院

[illegible]

詞花集　九条内大臣家開櫻花[illegible]　家隆

[illegible]

文應元年百首　爲家

[illegible]

建保三年歌合　　家隆

鈴鹿山にまよひし風やすて衣川流の波に花散るなり　　將親

名寄

鈴鹿なる関の山のくもまれてあてなる月　秋はまつ月

天文十一年大神宮千首　廣橋中納言

榊葉のさかゆく世代や鈴鹿山ゆきかふる道をやすらむ

御製

月やどる月とはいくとせ鈴鹿山あてなく宮れし関路なるらん

北畠国永集

ちりひちれたすりてなれる鈴鹿山のゆくの人乃世をさえひとそ　　三位行能

夫木

鈴鹿山神路の高ねをりてえて世と立ぬ見しれ　　為家

仝

鈴鹿山美しく東なる花芳紀神をりてこそ詠まるくらむ

仝

いせの海に夜ふるしや鈴鹿山ゆく於くかゆる　　慈鎮

仝

おもふ〜に関を鈴鹿のいせ山海をぬすむ風をすぶ　　匡房

仝

高ぬれをこそかなる鈴鹿山いかなるえを清ひ〜くらむ　　家長

仝

おりしたとかなるやいせ鈴の鈴鹿山ゆうこそ神〜ぬたくし

鈴鹿山前條ニ挙ル　コトク近江伊勢ノ堺ニ

ノ東街道第一ノ嶮路ノ山中ナル故ニ古昔ヨ

り鬼魅緑林ノ妄談ナリ紐仝トメ喧シ皆無稽
ノ言ニメ信難シ前輩具拠トスル一二ヲ挙ル
ニ勢陽雑記ニ伊勢國鈴鹿山ニ立帽子ト名鬼
女アリ往還ノ旅客ヲ害シ財宝ヲ奪フ故ニ坂
上朝臣田村五郎利成ニ勅メ征伐スヘシトテ
利成彼山ニ至ルニ金殿玉楼ノ中ニ美女アリ
陸奥國霧カ岳ニ住ム悪露王鬼ノ妻クリ利成
ニ愛着シテ其夫悪露王ヲ討シ妻ノ教ニ従ヒ
テ其女ヲ虜ニメ朝廷ニ奏メ再ヒ鈴鹿山ニ利
成往来メ密ニ男子ヲ産ス長メ正林ト名ク三
月ヲ経テ夫妻共ニ終ニ死ス其化女ヲ鈴鹿権
現ニ祭リ利成ヲ今ノ田村堂ニ祀リケルト云

云又中古此山中ニ旅人ヲ悩シ財ヲ奪フモノ
アリ上古ノ鬼ノ再生ト怪ミシニ一汐門アリ
テ此鬼ニ遇フ既ニ殺害セントス僧曰吾ヲ害
セン・ナラハ此秘文ヲ誦メ後来ノ悪報ヲ免ル
ヘシト云鬼九其志ヲ謝メ我ハ是長野殿ノ下
人孫六ナリ此山中ニ鬼面ヲ着テ人民ヲ誑シ
財物ヲ得ルナリトテ僧ヲ許サントス其咒文
教ノコトク受テ曰レイロ〳〵サンノキ〳〵ハン
ハデウヤデンノリンロ〳〵ト高聲ニ唱ヘ悪業
ヲナスヘシト教ヲ信メ常ニ大聲ニ呼ハリケ
ル此語ヲ聞テ實ノ鬼形ニハ非ス長野家ノ奴
僕ナリト知テ其主長野氏ニ訴フ即呵責メ罪

ニ伏メ誅セラルト云前大平記ニ此説ノコト
ク拳テ長野カ庄司ノ下人ナル故モンイロ〳〵
サンノドンシンハチウヤカ下部キ〳〵ハント
引カヘテ載タリ上ハ勢陽雜記ノ文ヲ揣テ出
ス前ノ田村五郎利成ノ説ハ弘安元年勅使記
云鈴鹿山鈴鹿姫坐路頭ノ北辺世傳言坂上田
村麿奉勅(征夷)往此山鬼女且相婚而女自伏罪就因
献之朝亦逃テ入山後田村麿追到テ為夫妻其
鬼女ハ是鈴鹿姫ナリト此文ト同シ○大平記
巻三十二大和國宇多森ニ鬼アリ人害ス源頼
光綱ニ命メ此鬼ヲ伐シム童代ノ大刀ヲ賜ル
鬼ノ手ヲ切テ頼光ニ見参ス頼光管ニ納セ日
ノ間閉メ斉戒スルニ河内國高安ヨリ頼光母
来リ彼母鬼手ヲ見ントセフ奪テ去ルニ頼光
太刀ヲ拔テ鬼ノ頭ヲ取ルコレヨリ鬼切ト名
ク其後此太刀ヲ源満仲ニ傳ヘテ鬼ヲ切レリ
右ノ釵ハ伯耆國會見郡大原五郎太夫安綱カ
作ニテ源家ヨリトキノ武将田村将軍ニ献ス
是ハ鈴鹿御前田村ト鈴鹿山ニテ釵合セノ太
刀ナリ○又一説田村利仁ノ子伊奈五郎田村
利宗ト云アリ奉勅勢而鈴鹿山ノ大竹丸ト云
鬼ヲ征ス彼大竹丸大トウレン小トウレント
云釵ヲ以テ戦フ故ニ田村利ヲ失又其時鈴鹿
山ノ麓ニ鈴鹿御前ト云美女アリ利宗潛ニ通

又大竹丸モ又慈慕シケル故田村彼女ト偽謀
リ大竹丸ニ通サセ二歛ヲ盗ミ其後鈴鹿ニ大
ニ戰フテ鬼ヲ伐ト云或ハ此時田丸カ守本尊
觀音出現シ鬼ヲ射殺ヒ云ヘリ○前條五利仁
ハ大系圖ヲ閲スルニ大織冠鎌足ノ後胤ニメ
鎮守府將軍藤原特長ノ男醍醐天皇延喜中ノ
人ナリ田村坂上等ノ名ナシ其餘利宗等考拠
ナシ又田村麿男伊奈瀬五郎利仁ト云猶拠ナ
シ田村麿男ハ坂上廣麿ナリ日本後記續本後
記ホ所見ナシ前件ノ鬼魅ト称スル者ハ好盗
ニメ世人ヨク識ル処ナリ彼立烏帽子ト云怪
ハ後一条院ノ朝藤原保昌ノ弟袴垂保輔追討

ノ宣ヲ蒙リシテ虎関記ニ載タリ今昔物語ニ
鈴鹿山ノ旧堂ニ鬼アリテ人ノ宿ルヲ得ス
然ルニ旅客三人宿リテ怪ニ遇タルヲ見エ
タリ古今著聞集十二朱雀門女強盗ノヲヲ記
メ昔コソ鈴鹿山ノ女盗人トテ云傳ヘタルニ
近キ世ニモ斯ル不思議侍ルニコソト云ヘリ
鈴鹿ヲ香ニ作ル又延元元年鈴鹿山ト大江山
ノ悪賊ヲ近国ノ地双汐汰ニテ平均セシメヨ
ト北条義時時房執達ノ事鎌倉式目ニ見エタ
リ○又前太平記藤原純友謀叛條ニ我々コソ
去延喜年中ニ伊勢国鈴鹿山ニテ官軍ニ打レ
シ山賊ノ首領伊壽丸カ孫ニテ候フ祖父討レ

テ後播テ国ニ住テ山陽山陰両道ノ者ハ皆
我等兄弟カ下風ニ立ツ者共ニテ候彼等ヲ招
カハ五六十人モ候ハン云云是伊賀壽太郎伊
賀壽次郎カ辞ナリ○又保元物語白河殿夜討
条ニ伊藤景綱云安藝守殿ノ良等ニ伊勢国住
人故市伊藤武者景綱同伊藤五伊藤六トノ名
ノリケル同シ良等ナカラ公家ニモ知レ進ラ
セタル我ナリ其故ハ伊勢国鈴鹿山ノ強盗ノ
張本小野七郎ヲ搦テ副将軍ノ宣旨ヲ蒙リシ
景綱ソカシ云云源平盛衰記巻四十一八嶋合
戦條平士武藏三郎左エ門有国嘲伊勢三郎義
盛詞ニ云伊勢国鈴鹿関ニテ朝夕山立シテ年
貢正税ヲ追落シ在々所々打入殺賊強盗ノ妻
子養フトコソ聞ケソレハ有シナレハ諍フ
処ナシ云云○又神宮雑事記云抑古記文云醍
醐天皇御代昌泰元十二月十三日祭使下向之
間鈴河山内白河強盗出来又上道人物取テ彼
此合戦之程勅使乃良等二人来會天中矢天死
去又盗人乃方一人被鉾殺已了仍使衛士前立
天過通リ後ヶ来此事有仍官幣進納已了其後
使奏聞件事仍以同年二月廿二日使天中臣神
祇大佑良忠等ニ参宮宣命状云去十二月日次乃
幣帛依例差使奉出立給而使参下乃間途中天
非道事者ニ使衛士等幣帛令捧持天彼危進退

天守式目如跡全奉仕ノ丁ハ寔皇大神乃無限
御領乃所致也悦申給ス云云鈴鹿山ノ強盗ノ
事蹟諸書ニ載スル処ヲ裁テ大略此ニ録ス余
カカカ浅陋尽ク閲見スルヿヲ得ス猶若干ナ
ルヘシ後人考索ノ知ヘシ又世俗田村ノ謡曲
ニ倣ヒテ坂上田村麿思ヲ伐ニ観音ノ佛力ヲ
得テ戦功ヲ著スト云巷談區々トノ掩フヘカ
ラス田村麿ノ事實一ニヲ挙テ是ヲ排斥ス日
本後記巻一延暦十三年甲戌六月甲寅副将軍
坂上大宿祢田村麿以征蝦夷同巻ニ延暦十四
乙亥冬十月甲申従五位下陸奥出羽按察使坂
上大宿祢田村麿為兼鎮守府将軍同巻三延暦

十七秋七月甲戌是日坂上大宿祢田村麿創建
清水寺同巻四延暦十八十一月庚子遣征夷大
将軍近衛権中将陸奥出羽按察使従四位上兼
行陸奥守鎮守府将軍坂上大宿祢田村麿検校
俘同二十年己巳九月丙戌征夷大将軍坂
上宿祢田村麿等言臣聞云云討伏夷賊同冬十
一月己未朔乙巳詔曰云云陸奥国乃蝦夷等歴
代渉時侵乱邊境殺畧百姓是以従四位坂上田
村麿大宿祢等遣天伐平掃治之年流尓云云同
巻五延暦廿一年正月丙寅遣従三位坂上田村
麿造陸奥国膽澤城秋七月甲子造成奥国膽澤
城使田村麿来夷大墓公二人並従同巻六延暦

国立公文書館
National Archives of Japan

廿四年十二月丙戌是年勅賜坂上田村麿清水
寺先是大納言禁寺十り同巻十弘仁二年神
五月丙辰大納言正三位兼右近衛大将兵部卿
坂上大宿祢田村麿薨栗田別業時年五十四田
村麿ノ行状正史ニ載スル処延暦ナ三年征蝦
夷延暦十八年撿校諸國夷俘此ニ條ノミニメ
戦伐ノ事不載猫鈴鹿山ノ鬼賊ヲ征スノ義更
ニナシ又観音ノ示現ニ非ス延暦十七年清水
寺ヲ創建禁寺ニメ同廿四年ニ田村麿ニ賜フ
ト載ル片ハ帝詔ニ應メ建立スル処明ナリ是
観音ヲ信スルニ非スメ其功力ヲ不蒙ルヿモ
著シ然レトモ又相似タル事跡アリ藤原仲成鈴

鹿山ニメ戦亡ノ義ヲ存ス標出メ考索メ便ト
ス日本後記巻九嵯峨天皇大同四年己巳十一
月申寅遣右衛門督従四位上藤原朝臣仲成等
造平城宮同大同五庚寅年七月甲寅為無伊勢
守参議従四位下藤原朝臣仲成為近江守同九
月丁未縁遷都事人心駭動仍遣使鎮固伊勢近
江美濃等三国府并故関撃右兵衛督従四位上
藤原朝臣仲成於右兵衛詔曰云云尚時正三位
藤原朝臣薬子者柏原朝廷乃御時尓春宮坊宣
旨登為ス仕賜比幾于今大上天皇尓親仕奉尓
依天忍都左御座然猫不飽云云三所朝廷尓毋
宮隔天登遂尓彼大乱可起又先帝乃万代宮登

定賜閑流平安京乎棄賜比停賜豆之平城右京
仁迁罗年土奉勘天天下遠擾乱百姓遠乙弊又
真尺伸成已力姓乃不能所乎波不教正之天親
王失人乎陵俗豆弃家棄路豆東西辛苦世年加
此罪悪不可數尽理乃任尓勘賜比罪奈閑賜布
閑之有止毛所思行有依天輕比宥賜布藥子者
位官解豆自宮中退賜天仲成者佐渡国権守退
登宣大上天皇避病於数所五迁之後宮于平城
而矣年釈重政猶煩出尚侍從三位藤原朝臣藥
子掌侍惟房矯紙而端天上天皇喜愛不知其奸
迁都平城非是之青天皇　其乱階擯於宮外官
位悉免焉大上天皇大怒遣使発義内紀伊国兵

是日宮中戒嚴同月戊申正四位下藤原朝臣良
長従四位下文室朝臣綿麿小被召自平城宮来
禁綿麿於左衛士府天外記従五位下上毛野朝
臣頴人従平城急來言大上天皇今日早朝白河
口道入于東国凡其諸司并宿衛之者皆従焉于
時遣大納言正三位坂上大宿祢田村麿奏請綿
麿武藝類之人經邊城冀將同行即駕兵馬又置
宇治山崎両橋乎渡津頭兵是夜命左近衛將監
記諸成右近衛將曹住吉豊継等射殺仲成於禁
所云云同月己酉大上天皇至大和国添上郡越
田村即聞申兵遮路不知行大上天皇遂知勢蹶
乃旋宮剃髪入道藤原朝臣藥子自殺又云云異

本日本後記云藥子贈大政大臣藤原種継女中納言藤原縄主妻也有三男二女長女大上天皇為大子時以迂入宮其母藥子以東宮宣旨出入於内天皇私焉徴メ為尚侍巧求愛媚恩寵隆渥所言之事無不聽容云云尚侍藥子知衆悪之帰已遂呑藥死云云賀茂皇大神祭記云嵯峨天皇弘仁六年大上平城天皇藥子カ竈ニ迷ヒ兄仲成カ、メニ依テ御位ニ復フンカ為都ヲ迂ントス、是ニヨリテ勅アリテ諸関ヲ堅メ田村麿ヲ大納言トメ禁中ニ守ラシム上皇大ニ怒リ義内紀伊ノ兵ヲ召メ藥子ト同輿ノ関東ニ趣キ玉フ又田村麿ヲ大将トシ文屋綿丸ヲ副将トシ御幸ヲ駐メシム田村麿身ノ大事コヽニ究リ又トテ深ク賀茂明神ヲ祈リ即鈴鹿ノ関ニコレヲ遮ル此ニ於テ両陣戦ヒケルニ彼神カ、加ハリケルニヤ数多ノ軍兵山ノ動クハカリニ現メ遂ニ仲成ヲ射殺シ上皇ヲ都ニ還シ奉ル云云○今考ニ日本後記ハ後人ノ撰ニメ取用ルニ足ラス猶其偽妄ナルニ鈴鹿山ノ鬼ヲ撃ノ義モ人神成ト戦闘ノ事曾テ不載賀茂大神祭記モ信シ難シ然ニ総ニ鈴鹿ニ仲成ヲ射殺ノ説アルニ拠テ前條ノ俗説ヲ排メ童蒙ノ惑ヲ脱スルニ至レリ故ニ兒戯ニ似タリトイヘ共諸昏ノ大略ヲ挙テ校正スル拠ス

ルナリ世俗此言ヲ訛傳ノ仲成カヿヲ悪露王トナシ藥子ヲ鈴鹿御前ノ鬼女ニ作リ妄談ヲ偽セシト憶ヘリ古昔物語ト云ニ近シ識者ノ信スヘキニ非スト云ヘ𪜈一嘲ノ茶談ニノ所挙ナリ今撿スルニ俗習ニ拠テ土山駅東ニ田村明神ト称ス祠アリ祭神中央ハ田村麿東ハ嵯峨天皇西相殿ハ鈴鹿御前ト云神室ニ田村麿鈴鹿御前ノ画像アリ彩墨精麗ニノ表補甚美ナリ又鈴鹿山ノ嶺ニ田村堂アリ田村麿ノ像ヲ安置ス各後人ノ祭祀スル処トイヘ𪜈一嘘ノ妄談数千歳ノ後ヲ惑ハス恐ヘキノ至リナリ前ニ云田村麿鈴鹿御前ノ鈔合ト云事ハ田村草帝ト云モノニ拠テ記セリ源平盛衰記巻四十一唐皮小鳥抜九ノ大刀事條平家ニ後九ト云叙アリ他大納言頼盛卿ニアリ中古伊勢国鈴鹿山ノ邊ニ賤ク貪ヨキ男アリケリ身ノ乏キ事ヲ歎キテ常ニ精進潔齊ノ大神宮ニ詣テ世ニアランヿヲ祈リ中年頃日來怠ルヿ無リケレハ神明其志ヲ憐ンテ汝深山ニ遊猟ノ獣ヲ得テ妻子ヲ養ヘトテ現シ玉ヒケレハ御託宣ヲタノミ鈴鹿山ヲ家トメ夜昼猟メ獣ヲ得タル片ハ妻子ヲ養ヒ得サル片ハ口ヲ空フス是ヲ以テ一期治命ノ便リトナスヘシ𪜈覚ヘサリケレハ我年来参詣ノ功ニヨリテ霊

夢ヲ感ス神慮ニ任セ深山ニ遊猟スレトモ身ヲ
助ル謀ナルヘシトモオホエス大神宮イカント
御計ヒ有ヤラント愚ニモ冥慮ヲ恨ミ奉リケ
ル折フシ三子塚ト云処ニテ奇キ太刀ヲ求得
タリ此大刀ヲ備テ後ハ聊モ目カヽル禽獣鳥
類遁ルヽナシ然ルヘキ宝ナリケリ是天照
大神ノ冥恩也ト思ヒケレハ昼夜ニ身ヲ放サ
ス或夜鹿ヲ得テ大ナル木ノ下ニ宿ス大刀ヲ
大木ニヨセ立テ其夜ヲ明ス朝ニ此木ヲ見レ
ハ古木ノコトクニノ枝葉皆枯タリ猟師不思
議ニリ思ヒケル月比日比モ此木ノ下ヲ栖象
トセシカトモ扨コソ有シニ夜部マテハ翠ノ
梢盛ニコソ有シニ今夜此大刀ヲ寄懸タルニ
ヤ一夜カ内ニ枯タルコソ奇シケレ是定テ神
剱ナラントテ木枯トソスコツケタル真比刑
部卿忠盛伊勢守ニテ
ノ猟師ヲ召此大刀ヲ見玉フニ異国ハソモ不
知我朝ニハ難有キ剱ナリトテ世ニ欲ク思ハ
レケレハ栗真庄ノ年貢三千石ニカヘテ取ラ
レケリ扨コソ猟師衆冨身ユタカニノイヨ〳〵
大神宮御利生ヒ思知リケリ忠盛都ヒカヘリ
上リテ六波羅ノ池殿ノ山庄ニテ昼寝ノ前後
モ不知方ハシケルカ此木枯ノ大刀枕ニ立テ
置レタリ大蛇池ヨリ出テ口ヲ張リ游テ近付

忠盛ヲ呑ントス木枯鞘ヨリ颯トヌケテガハ
ト轉ビ倒ル、音ニ驚テ忠盛起ナホリ見玉フ
ニ釵ハヌケテ鋒ヲ蛇ニ向フタリ蛇ハ釵ニ恐
レテ水底ニ沈ミケリ大刀アガハト倒ル、ハ主
ヲ守テ大蛇ヲ切ンカ為ナリケリリレヨリ木
枯ノ名ヲ改テ抜丸トリ呼シケル平治ノ合戦
ニ頼盛三河守ニテ熊手ニ懸テ討ルヘカ
リケルニモ此大刀ニテ鐔金ヲ打切テ遁シ玉
ヒケリカヽルノテタキ釵ヲレハ嫡子ニ傳ハ
ルヘカリケルヲ頼盛當腹ニテ相傳アリケレ
ハ清盛頼盛兄弟ナレトモ暫クハ中アシタカ
ハシケリト聞エキヽ此事蹟鍛冶譜ニモ載

タリ平家物語モ同シ　前大平記平貞盛為将
門追討使賜唐皮小烏條云此唐革小烏ト云ハ
貞盛ノ高祖桓武天皇都ノ平安城ニ迁サレテ
天下兼平国家安鎮ノ為ニトテ紫震殿ノ皇居
ニ檀ヲ構ヘ胎藏界ノ不動明王ノ尊像ヲ安置
シ奉リ祈師ニハ天皇ノ御叔父慶円ト申ス真
言ノ奥義ヲ極メ四修三密ノ棟梁タリ則勅命
ニ従テ本尊ニ向ヒ釵印ヲムスヒ件ノ法ヲ修
セラレケル既ニ七日結願ノ未刻ホトリニ紫
雲渦巻下リ雲中ヨリ荒ラカニ檀上ニ落ルモ
ノアリ月卿雲客奇異ノ思ヲナシ玉フ暫アリ
テ雲消檀晴テコレヲ見レハ一面ノ鎧アリ櫃

白ヒニ白ク黄ナル面蝶ヲ鋸金物ニ打リ糸威
ニハ非スメ革威ナリ裏ヲ返メ見ルニ實間く
ニ虎ノモアリイカサマ虎ノ皮ニテ威タリト
ソ見エシ實モ尋常ノ物ナラス天皇ノ審ニカ
ナシ召其吉凶ヲ尋下サレケレハ慶四勅答申
サセ玉ケルハ柳不動明王ト申奉ルハ外ニハ
惡魔降伏ノ相ヲ現ストイヘ共内ニハ慈悲愛
愍ノ心ヲ具足セリサレハ火焔ヲ身ニ現メ女
我ノ相ヲ現スハ大日胎藏ノ身ヲ現メ大歳ノ
腹体ヲ垣断ノ謂ナリ此垣胄ニ非ス動不動ニ
七ノ鎧アリ兵頭兵体兵足兵背兵指兵面是ナ
リ皆五天五国五花相兼相對メ人ノ五体ヲ囲

フヘキ器ナリ然レハ別中ノ守甲冑ニ如ス就
中此鎧ハ七面ノ中ノ兵面ナリサレハ此鎧ハ
真言秘教ノ中ヨリ出テ不動ノ化現シ玉ヘル
処ナリ我朝ノ守何カ是ニ増ルヘキトソ宣ヒ
ケル則是ヲ唐皮トソ名附ラル此鎧出現メ七
日ニ相當ル日主上南殿坐メ東天ヲ御拜アリ
ツルニハ天ノ靈鳥飛来リ大床ニ侍リ主上御
笏ヲ持テ招キ召ケレハ件ノ靈鳥勅命ニ由テ
踊リ上御坐ノ縁ニ嚙ヲ撫テ奏メ申ケル我ハ
是大神宮ヨリ御劔ノ使者ニ參レリトテ羽刷
メ飛去ケル其跡ニ一ノ大刀ヲ落シトヘメケ
リ主上御自此劔ヲ召レテ八足ノ大靈鳥ノ中

ヨリ出タル物ナレハトテ小鳥ト名付ラレ彼
唐皮ト共ニ執シ思召ケルサレハ大刀モ鎧モ
同ク佛神ノ制作ニテ本朝守護ノ兵具ナリ六
代マテ大内ニ傳ヘ其後武道ニ遣シ將軍ニ賜
フヘキ由天皇ノ御記ニ留メ置玉ヘリシカル
ニ今貞盛朝敵追討ノ首途ナレハトテ代々ノ
重器ナレ氏是ヲ下シ賜リケリ貞盛弁領メ爭
カ心ヲ勵サヽラン天下ノ敵又ノ仇速ニ誅戮
メ追ツケ歸洛仕ラント勇ミテ東国ヘコリ下
リケレ　前説木枯ヲト鳥ト音近キニ拠テ傳
ヘ誤リタルト聞エタリ然ニ前大平記ハ潤色
メハ尺ノ大灵鳥ヨリ得ル処ト云ハ例ノ浮圖
氏ノ妄誕ニメ六呂見村ノ四足ハ鳥ニ同日ノ
談ナリ是ヨリ附會セシナルヘシ大鳥ニ獲ル
処ナレハ大鳥ト称スヘキニ小鳥ト名クルハ
怪ムヘシ是木枯ノ訛傳ニテ源平盛衰記ヲ真
トスヘシ其木枯ノ證ハ下ニ辨ス

勢陽五鈴遺郷音鈴鹿巻之一終

勢陽五鈴遺響　鈴鹿郡巻之二

式内方山神社　鈴鹿山ノ麓官道ノ左ノ傍ニアリ

社域左ノ路傍ニ神官
社司ノ家アリ右傍ニ御禊殿俗神樂殿ト云是
り土俗鈴鹿権現ト称ス
古昔斎主禊行ノ鈴鹿頻宮ノ遺趾ナリ正面鳥
居左傍手水所石階ノ上ニ中門アリ又石階一
級右傍ニ神馬左ニ稲荷祠直會屋神馬ノ右ニ
アリ又石階一級上リテ南面ニ本社傍ニ大山
祇祠本社ノ右ニ祭ル者巧昊祠右傍壇上ニア
リ愛宕小祠正面ヨリ石階ヲ下リ前ノ稲荷祠
ノ傍ニ帰ル其餘小祠神宝旧籍等許多アリ

度會延經神名帳考證ニ片山神社古事記ニ大
山津見神之女名ハ神阿多都比賣伊豆国阿米
都加多比咩命ノ神社加ヲ阿音通ス今鈴鹿社
乎弘安元年勅使記ニ鈴鹿山鈴鹿姫ノ路道之
北辺世傳ニ坂上田村麿奉勅征此山鬼且相婚
而女自伏罪就囚献之朝ニ逃入山後田村麿追
到テ為夫婦妻其鬼女ハ是鈴鹿姫也按此征役
事不見于史藉田村者千守言通謂穀靈讃岐國
田村ノ神社伊賀国田守ノ神社常陸國稲荷ノ
神社以穀屬木木靈配阿多津姫為其夫乎田村ト
麿同名因作征代之語終至失其實顯神者也
度會正身神名帳再考證ニ片山神社片ハ假字
ニ画ルカコトシ是ヲ古ハ像山ト云シナルヘ
シ社地此山ノ麓ニアリテ今ハ熊野権現ナリ
ト云トソ實ハ所祀大山祇ナリ云云○親穀考
ニ延經考證ハ片山神社ノ名義ハ大山祇命ノ
女神阿多津比賣命伊豆國阿米都加多比咩命
神社ニ加多比咩ト云ニ同ク加ノ字阿ト通音
ス故ニ阿多津比賣ヲ祭リ加多比咩命ノ名
ニ拠テ片山ノ社号起レリト云義ニメ今ノ鈴
鹿社ナルヘシ弘安元年勅使記ヲ引拠メ坂上
田村麿ノ伐タル鈴鹿鬼女ハ鈴鹿姫ニメ此史
像ナルヘシ古キ辞ニハ繪カクヲカタカクト
云関路ノ辺俗狩野ノ筆捨山ト云アリ其山實

藉ニ不載レハ田村ト云ハ村ト守ト通スレハ
穀霊ヲ謂ヘシ讃岐国田村神社伊賀国田守神
社常陸国稲村神社相俱ニ穀ハ木ニ屬スレハ
木ノ霊阿津比咩ニ配シメ其夫ノ田村麿ト云
ニ遇シ田村田村麿ト同名ナレハ征伐ノ事ヲ
載テ其實ヲ遺ヒメ神霊ヲ黷ス処ナリト解セ
リ正身再考證ハ片山ノ名義ニ片山ハ像ナル
ヘシ画圖ヲ畫クヲ古言ニ像カクト云ニ拠リ
本郡一ノ瀬筆捨山ト称スルハ片山ノ名ノ像
山ト云ニ充レリ其山下ニ熊野権現ト俗称ス
ル神社ナリ其真ニ所祭ハ大山祇命ナリト注
セリ愚案ニ考證ハ片山ノ名ニ拠テ神阿多津
比賣或加多比咩ノ神名ニ奉強ノ片ノ字ヲ釈
シ山ハ大山祇命ノ名ヲ據テ其山ノ名及奉祀
ノ神ヲ定タルトイヘ氏解シ難シ加多比咩ヲ
弘安勅使記ニ載ス処ノ鈴鹿姫ヲ強テ填ルニ
至リ田村ハ穀霊ニメ木ノ霊阿多注比咩ニ配
スレハ此神ヲ祭ルトニ云ヘキニ拠トスル臆断
ニメ此釈ヲナスニ至リ前後ノ言一定シ難シ
又再考證ハ片山ノ名ハ像ノ義ニメ画圖ノ事
ヲ引拠スルハ下ニ筆捨山ノ熊野神祠ヲ片山
神社ニ配スルノ言ヲ設リ序詞ナリ各推テ解
スル処ニメ従ヒ難シ其故ハ方俗今ノ鈴鹿権
現ノ社域ヲ片山ト云ハ其真ヲ得サル ナリ猶

社域ヲ親見セスノ大山祇命ヲ片山ノ名ニ拠
リテ定タルヲ真ナリトスルハ妄ナリ疑ラク
ハ前考證ヲ排セントスル設ニノ慕古ノ確論ニ
非スト謂ヘシ既ニ後號本郡那久志理神社考
證ハ野村ノ南忍山白髭明神ヲ充タリ再考證
ハ那久志ノ名義ハ根越入ニノ根ハ峯ノ畧語
京ヨリ伊勢ヘ来リ入ルノ始ナレハ神名帳ノ
始ニ置祭ル神ハ斉主群行ノ片鈴鹿川ハ七瀬
ノ祓ノ一ニノ此山ハ其源ノ出ル処ナレハ祓
所ノ神瀬織姫ヲ祀レリトヱ即今ノ鈴鹿社
ヲ那久志理神社ニ充タリ其那久志理ノ名義
ハ愚考ノ其條ニ詳ニセリ是根越入ノ義ニ非
ス猶鈴鹿社ヲ強テ那久志理神社ニ合スヘキ
ノ妄談ナリ前ニ片山ノ像山ニ附會スル臆説
ト相同シ更ニ其證ナシ従フヘカラス総テ地
理ハ其地ニ跋渉ノ探リ索ザル片ハ如是ノ牽
強ノ言ヲナスニ至ヘシ諸家筆墨ヲ空譚ニ費
シ後人ヲ誣惑スルニ至レリ遺憾トスルニ堪
タリ今ノ鈴鹿社ノ地ハ旧古ノ処ニ非ス後世
ニ迁シタルナリ上世ハ今ノ社域ヨリ八丁許
乾位ノ山中幽邃ノ地ニアリシ処ニ前條鈴
鹿山大倭国ヨリ伊賀ヲ踰テ此山路ニ至リ有
内親王鈴鹿ノ頓宮及祓禊シ玉ヒシ旧地ニノ
其傍ノ片山ニ坐ス処ノ神社ニノ社号ニモ負

タルナリ故ニ今ニ鈴鹿社ノ傍ニ身曽岐殿ト
云殿宇ノアルモ其地ヲ摸セルナリ古昔ノ神
社ノ地及育主鈴鹿ノ頓宮ノ旧墟今ニ存セリ
石藥師駅隱士萱生紀由章鈴鹿郡賦表斤山た
の名ニツ国山近江と伊セの斤山影瀬津姫と伊
吹戸主すら姫なる戸の之神なりしものむら
〻此天の災なりし此所の今れ地ま移し傍
姫をそつをうなりなせるりてすら山桂現もなる
明神も是主実の社と伝りや如し所れし一書
ヨト恐姫を伝つるてふ和歌もなりなりけれま又説
もなりなる姫社なれと道主の附ま行てとう
さしまへ多もあるめりし皆うけ村ま八石の神

領田もつ家まりの心主のくうこえめるまりて
社家の伝へまを珍庫なるたふけの名ろ坂切河
なれいう〻への玉さうし應永ナニの山ふれそのあ
義のかるまり貞享の末治今とたるむうしま
珍庫の状ま田村の社は坂のうへまなるしう
仁和の比四録〻たまやてふ地名てかり
を称るとうや
各長哥ニ作りテ本郡ノ旧社古蹟ハ詳ニ辨知
セリ猶余親ラ歴覧ス処ニメ其真ヲ得ルモノ
許多ナリ此ニ拠テ其地ヲ閲スルニ本社ノ字
ハ片山東鑑所載ノ三箇山ニメ方俗所謂三ツ
子山ナリ其三峯聳並テ近江本州ノ堺山ナル

ハ世人能ク所識ナリ古昔其山腹ニ坐セシ故
ニ片山神社ト称スルハ誣ヘカラス他ヲ容ル
ヿナシ然ルニ中世野火ニ罹リテ焼亡セシヨ
リ今ノ社域ニ移シ鈴鹿明神或鈴鹿権現ト俗
称スルナリ社傳ニ祭神祓禊ニ拠テ瀬織津比
責命伊吹戸主神佐々良姫命三座ヲ合祀ス後
ニ今社地ニ迁シ倭姫命ヲ併セ祭レリト云社
領ハ近江沓掛村ニメ朱八石関城主関安藝守
ノ時ヨリ以往傳来メ今ニ至リ貢進スト云坂
下駅モ本居神トメ例祭三月八月祭祀アリニ
ンニク祭ト俗称ス又近江本州ノ堺ハ鈴鹿嶺
ニ堀切河アリ是ヲ封彊トス今国界ハ沓掛村
ノ東鈴鹿山ヨリ西ノ下リ坂近江国山中村ノ
東ニ標木ヲ建タリ此地ハ應永十二年洪水ノ
山頽ヨリ水脈今ノヿトク變セリ又鈴鹿頓宮
ノ旧址ハ今ノ田村社ト云地ノ南ノ山上ニアア
リ字ヲタマヤト俗称ス処ナリ其地ニ鏡石ト
云巨石アリ毎二月八日土人注連ヲ牽テ不潔
ヲ避ク愛宕権現出現ノ処ト云ハ謬傳ナリ弁
内親王近江国国府甲賀垂水ノ頓宮ヨリ此ニ
入御シ一志頓宮ヲ経テ斉宮寮ニ着御ノ順路
ニメ所謂鈴鹿御禊ハ此処ナリ謡曲野々宮ニ
モ作ナセリ又公卿勅使例幣使等モ伊勢参向
ノ時ハ此祓禊アリタルナリ神宮雑事記永義

元年九月八日嘉子内親王参着斉宮群　行中
臣祭主神祇大輔永輔朝臣也即祭使寮双八正
五位下平朝臣雅康兼斉宮ノ霊祓勘使史伴兼国
等也仍宮司明輔欲為造宮使二箇度供奉勤仕
抑斉宮御羣行之間非常多々出来九月八日霊
田口仁天馬足犬踏斃甲賀頓宮長奉送使乃侍
臣中納言藤原朝臣信長乃御房駄斃天鈴鹿頓
宮女別當雑色子寮双雑色打合天各頓血流出
一志頓宮使部等随身駄俄斃亡是則十三日朝
見付仍十五日御祭参宮事祭主可定申之由寮
内被仰之処祭主申云尤可為穢氣也者而撿非
違使右工門尉雅宗公方申云不為穢早可有御
参宮也云云○又弘安九年公卿勅使記鈴鹿山
鈴鹿姫坐路双之北辺也ト此時已ニ今ノ地ニ
迁リタルニ非ス北辺ト云片ハ旧址ニ坐ス時
ナル、ヘシ當今ハ街道ノ南ニ在スヲ以疑ヘリ
其頓宮ノ地上世ハ大倭ヨリ伊賀国栢植ヨリ
本州鹿伏兎ノ北ヲ經テ鈴鹿方山ノ南ヲ踰ル
長峯越ト云今ノ社傍ノ南ヲ鈴鹿川ニ隨テ今
ノ関駅ノ南ニ通シ東街道及本州大神宮及斉
宮ニ詣ル処ナリ方俗古ノ中道ト云ハ是ナリ
是頓宮及方山神社ノ坐ス時ノ旧路ニメ光孝
天皇仁和二年ニ今ノ宮道ハ開カレタル処其
時旧路ハ廃セシナリ三代實録ニ見エタリ猶

頓宮大厄ニ拠テ地ヲ換移建ラレ及官道ヲ開
カレシヿハ同時ニメ六月新道ヲ開キ九月ニ
火厄アリ然レハ新道ニ建ラレタルト憶ヘリ
其旧址ハ未詳今云鈴鹿社地ナリトイヘヒ火
厄ニ拠テ建ラレタルト云ヒハ其設ノミアリ
タルノミニテ其前ニ火厄アリテ愈地ヲ換ラ
レタリト憶ヘリ孰レ仁和二年ニノ同時ナリ
○三代實録巻四十九光孝天皇仁和二年九月
廿日、乙巳奉送伊勢斎内親王使中納言藤原朝
臣山蔭ニ十八日奏帖今日申時到来倆今日己
時王輿出自近江国垂水頓宮西時到伊勢国鈴
鹿頓宮戌時西垣之外一借屋火アリ内親王乘
更衣滋野朝臣直子車出頓宮即遣守藤原朝臣
継蔭有督近衛等救止不能撲滅西風甚扇キ火
勢甚熾シ遂及寢殿等延焼四屋以垣外借屋為
寢殿安置内親王召問寮司申ノ云火発舎人長
礒部豊滝宿禰賜山蔭乎勅曰須過七ヶ日入于斎
宮若ハ有物ノ煩不可過七日者解謝ノ早ク可
入云云○今案スルニ此火厄ニ拠テ其地ヲ移
サレタルハ今ノ鈴鹿社ナリト云方山神社祭
神ニ諸説區々トノ安誕多シ倭漢三才圖繪ニ
鈴鹿社一座大此古命川俣造之祖引倭姫命世
記云云鈴鹿社在鈴鹿郡伊勢近江伊賀三国界
有鈴鹿山権現鎮座是乃大比古命謂権現非也

勢陽雜記ハイカナル神ニヤ未詳ト云背書国
誌及古屋草紙ニ祭神大山祇命神阿多津比賣
命ト載ス是考證ニ從ヘルナリ勢阿倭大神
鈴鹿宮三箇月坐スト云ハ大神ノ坐シケル
御跡ニテ後代ニ大彦命ヲ祀タルナルヘシト
云是鈴鹿忍山宮ヲ混セシナリ伊勢名所圖會
祭神三座中央瀬織津姫左黄吹戸主神右瀬罗
姫命ハ神名アヤシムヘキナリ方山神社ト傳
ヘ云フナリ中央ハ天照皇大神ノ荒魂瀬織津
姫命左伊吹戸主命右速佐々良比賣命以上三
座後世ニ倭姫命ヲ合祀リテ相殿トス然ニ延
喜式ニ一座ニ填ル片ハ後ニ至テ三神ヲ各併

祭レリト謂ヘシ背書国誌古屋草紙等ハ考證
ニ倣ヒ神阿多津比賣命ハ陰神ヲ祀ルヲ是ト
スルハ俗説ノ鬼女鈴鹿御前ノ名ニ比シ或ハ
方山ノ名ニ拠テ大山祇命ノ女ナルヲ以奉强
スルナルヘシ古事記於是天津日高日子番ノ
能尓全藝能命於笠沙御前遇麗美人尓問ク誰
カ女ノ荅白ク之ハ大津見神之女神阿多都比
賣亦名謂木花之佐久夜比賣阿多都比賣一座
スレハ三箇山ノ名ハ三神鎮座ノ地ナレハ名
クト云説ニ不當然レ共三箇ト名クハ康鑑ニ
載タル処ニメ延喜式撰ノ時ノ名ニ非ルヘシ
後ニ一座ヲ併祭タル後ノ名ト憶フヘシ三箇

ノ山鎌倉三代ノ世ヨリ起レハ三座ヲ其時ヨ
リ合祀スルトミユ背書国誌弥年居神社ニ元
ルハ非ナリ或縣主社ト名クト云ハ是大彦命
ヲ祭ルト謬ヒルニ拠テ妄ニ称スルナリ各諸
家祭神區々トノ一定シ難シ又鈴鹿頓宮ノ称
ハ路程ニ食ヲ設ル意ニノ殿舎ヲ置タルナル
ヘシ文献通考云唐太宗貞觀四年詔所司於外
廊置食一頓云云○事物紀原云引宋朝會要云
建隆中將郊祀ト云云餘ノ二十旗悉ク立於宿
頓宮ノ前丹鉛惣録云俗詰飯スルヲ曰一頓其
語亦古存之○又隋書煬帝記云每之一所輒ク
敷道置頓○又元微之建昌宮詞云馳令供頓不

敢藏文字解詰云續食曰頓朝野群載云頓料解
文進上親司頓料物事合若干右依例如件此等
昏ニ拠テ頓宮ノ字義ヲ知ヘシ　新勅撰詞書
権中納言通俊斎宮群行ニ鈴鹿の頓宮まて旅
のくるしさはいかはかりなるよ
いにしへのしらんかなしの旅寝する芦の仮屋の
鈴鹿河　水源ハ鈴鹿山中ヨリ流出テ方山神社
ノ南ニ流此処ニテ筱谷川ト云坂下駅ニ至リ
南ヲ経テ三箇山ヨリ出ルモノト合シ本郡一
瀬村ヲ経テ庚流ノ加太川ト合ノ本郡関駅ノ
南ニ流レテ此処ニノ関川ト称スト野村ニ至
リ一流ハ本郡池山村安樂平尾ヲ経テ川嵜村

ニ至ル安樂川ト称ス又一流ハ本郡上野南北
畠村ヨリ川嵜ニ至ル一流ハ本郡小岐須村ヨ
リ小社伊舟ヲ經テ川嵜村至ル祝川ト称ス又
明神川トモ云以上三流岩森川嵜ヲ名越ヨリ
巽位ニ流テ東街道泉村西冨田ニ至リ鈴鹿川
ト合ス此処イツヽ川ト称ス是ヨリ中冨田汲
川原高宮甲斐村ニ至ル高宮川或甲斐川ト称
ス又河曲郡木田ニ至リ石藥師川ニ合シ高岡
村ニ至リ高岡川ト称ス是ヨリ東流メ三重川
南川村南北五味塚ノ間ニ至リ東海ニ入ル水
源ヨリ東海ニ至リ長五里十八町本郡ノ大河
ナリ然レトモ鈴鹿川ト称スルハ古昔方山社域

ヨリ流出テ関駅ニ至ル間ヲ称ス今古ノ異アリ鈴鹿郡賦ニ世俗今ノ関驛新処ノカロト処ト云処ノ谷川ヲ万葉ノ哥ヲ引テ鈴鹿川トイヘトモ水上ハ観音山ノ下ニテ俗ニ風呂屋ノ清水ト云纔ナル講川ニメ古昔ノ鈴鹿川ニ非ス勢阿俚諺云古昔鈴鹿川トイヘルハ関宿ノ内中間ニ北ヨリ南ニ流ル小川ヲ云ナリ然レトモ今ハ形ハカリノ溝川トナレリトヽ是新哥ニメ怪ムヘシ今駅中ノ溝渠ニ石橋ヲ架セリト云ヘトモ然ニハ非ス妄ナリ従ヒ難シ仍テ上世ノ街道方今ト異ナルアリ時世ノ沿革ニ従ヒ或鈴鹿関モ数〻地ヲ易タルカコトシ街道

ノ変スルニ拠テ所置ヲ変ス鈴鹿川モ古今匿
ケトノ異説アリ然レ共鈴鹿山中ヨリ流出テ
河曲三重郡ヲ経テ東海ニ注入ヲ真トメ異論
ナシ

新古今太上天皇

滝原のふるき木ぬれ霧ふりて山田の原にたくもとぞ見る

後成

新勅撰

かりそめにいくよなりぬる滝原の八十瀬もたゆきこなれのに

後京極

仝

滝原の八十瀬の波を尋ぬ

後撰

僧正行意

滝原のをさけられハ神路山柿ハそめてお月うけ

式乾門院御匣

続古今

ちはやふる八十瀬をこえて滝原川むかしまなんを忘やハする

正三位知家

仝

滝原の我身ゆりめる老の波八十流もちりくなる神の郡

続拾遺

七十のよ水まさる滝原の波よる紅葉しにけ

玉葉詞書 斐子内親王ゆのあしらおかるる

滝原の八十瀬の波をあもせて見しぬ神ぬ紅葉

金葉詞書 六条右大臣北方都芳門院いせりお

ちゆ時ちるる

ちやくちたのこちるりし滝原川を流

万葉

讀人不知

ひさかたの八十氏の宮の秋萩の枝もたわゝなる露の重さに

新拾遺

源兼氏

神代よりいくとせすめしかの川八十氏の宮も秋の物なれ

新後拾遺

橘遠村

ひさかたの八十氏の宮の月の影のかげ

新續古今

醍醐入道大政大臣

ひさかたの雲きなれとなく雁の声

同

従三位雅家

ひさかたの雲のうへ人ゆくとてあて住を神のめぐみ給へ

同

すゝ川れや関と成ぬる八十氏の宮もゆやゝぬまゝ

新葉集

後村上院

ひさかたの八十氏の宮の宮ゐ

全

妙光寺内大臣

神もはらへたれを命の八十氏の宮の宮

拾玉集

慈鎮

ひさかたの雲きせの宮の神ぬさ

家集詞書 貞恒延喜十七年いせのさいくの宮

うゑ初くの名たゝ初をかせ宮の風のゝ

めしたしは八十氏山たてまつりをし

ちはやきいせの宮氏山川のやゝ

御集

順徳院

ひさかたの八十氏のやゝとものいろるあてはかはらをかるまゝ

仝

底清きすゝ川原の音波のゐなゝ間なく袖をぬらす

源氏榊巻

ゆ袖をりふしも波原の八十瀬の波よ袖をぬれしや

仝

波原の八十瀬の波をぬれゝとはれられしれぬせん

国信

堀河百首

ときかつり思ふ波のゐるりれ山ひゝゝせれ波原川ふ

詞花集

皇嘉門院次部卿

おもふのりとゆるゆゝる波原川八十瀬の波を立ぬらめる

越前

夫木

波原の八十瀬の波を尋ぬ神風ゐ吹といのらん

後京極

仝

波原川波とゝ尋ぬすゝ八十瀬とゝ尋ぬ玉ハとれに

光俊

同

波ゆゆる八十瀬やいつと舟屋ゐ尋ぬ波原の山川れゆ

忠峯

同

名ゐはいつと尋ゐも法ぬすゝ川瀬ゝの舟ぬ袖ゐ

定家

仝

波原川八十瀬の波も玉のいろハふゝ〳〵なれ浦とゐ袖れ

好忠

名寄

すゝ川八十瀬の波の舟なれハれやとちてむすひそめゐん

同

波原の波名と玉ゝいせの海人の袖なれ夜ゐゆ袖をりん

天文十一年大神宮千首　飛鳥大納言

飛鳥井の里高く月ふけて声もすゝゆく友あるの邪

仝　左衛門督

飛鳥川八十瀬の波も立川くまゝひとくの船うすゝ

建保三年哥合　家隆

すゝの山天は嵐や捨衣ゝ瀬の波ゝ花ゝ

同　定家

飛鳥河八十瀬ふゝりゝるみてゝらと君ゝ代ゝ忘ゝ

曙記　烏丸光廣卿詞書ゝ飛鳥の旅路ゝ

法興とゝ名ゝ号ゝる寺の下れ京ゝ遷ゝ仮宮

の菱形瓦を乃見ゝ出ゝ土ゝ遺ゝ跡ゝ日の新ゝ宮の

ものゝもゝ仏中宮八日天皇御の間ゝ参ゝ

立川流の波ゝ方ゝ上ゝ流ゝ船ゝ日ゝ参ゝ

飛鳥川ゝ流ゝ水ゝ八十瀬ゝ有ゝ波ゝ乃ゝ多ゝ

○若妻川　官道ノ往還ニ橋二ケ所ニ架セリ橋ノ名モ同シ又坂下駅中ト東ノ入口ニアリ皆鈴鹿川ノ下流ナリ

○清滝山観音　鈴鹿坂ヨリ坂下駅ニ至ル官道ノ北傍ニ清滝川ノ邊ニアリ後ノ山ヲ穿テ岩窟ノ中ニ自然ノ石室ヲ巧ミ弥陀観音地蔵三像石佛ヲ安置ス傍ニ飛泉アリ清滝ト称ス故ニ名ク鈴鹿郡賦ニ万治中實山和尚創造ス或清安寺六世密丹和尚元禄年中造立スモ云岩

屋ノ観音ト俗称ス

坂下驛　東街道五十三驛官道ニ民居ス近江国甲賀郡上山駅ヨリ東一里半ニアリ○正税六百石公領十リ鈴鹿坂ノ麓ニ居ス故ニ名ク佐加乃志多ト訓ス鈴鹿坂ヨリ十八町民屋百六十餘戸アリ近江国甲賀郡山中村ニ至ルニ十六町五十間又鈴鹿嶺ニ茶廛アリ峠ノ茶屋ト称ス本邑ニ属セリ○本邑往昔ハ鈴鹿山ノ麓ニ民戸アリ慶安三寅年九月三日洪水ニ漂没メ屋舎畠悉ク流亡ス故ニ官許ヲ蒙テ修補セラレ同四年卯十月八丁許東今ノ駅家ノ地ニ移迁セリ故ニ今鈴鹿山ノ麓ニ四五戸民屋遺レリ坂本村ト云或古町ト称ス是駅舎ノ遺址十リ本邑ニ属ス旧名鈴鹿驛十リ上世ノ官道ハ鈴鹿川ヲ南ニアリテ関駅ニ至ルニ河流ニ隨ヒテ往還スルニ若干ノ瀬ヲ陟リタル故ニ八十瀬ト名ク當今ハ鈴鹿川ノ北ニ官道アリテ通行スレハ八十瀬ト云ヘキナシ旧時ヲ憶ヘシ今ノ東街道ハ寛永中ニ創テ造ル処十リ土産木櫛方俗坂櫛ト称ス又坂弦弓弦ヲ製メ售ル○北畠教具記ニ云ヒ○後成恩寺殿記ニ坂弦関弦都合百弦ト載ス此処ヨリ往昔製造メ出ス今絶タリ其弦ノ打様ハ弓道古實者流ニ傳来ス今ノ弦ニ異ニノ弭ノ処ニノ双方ヲ

輪ニ打タルモノトイヘリ○鈴鹿山金藏院護
国寺同処ニアリ天台宗下野国日光山ニ属ス
仁壽中慈覚大師開基中興文禄年宣盛法印慈
眼大師ハ法眷ナリ本尊藥師佛体中ニ傳教大
師感得一寸八分ノ尊軀ヲ収テ安置スト云中
興開山宣盛法印南光坊天海僧正ノ法縁ニ因
テ寛永十一年大猷廟御上洛ノ片此院ニ入
御ノ処ニメ旧領三十石寄セラレ御休憩所ト
称ス古昔ハ當寺鈴鹿山ノ麓ニ建タリ洪水ノ
後慶安四年坂下駅民屋ト同ク此ニ迁セリ故
ニ鈴鹿山ノ号アリ
○真福寺同処ニアリ鹿伏兎氏創立ニメ開山
佛通禅師禅宗應永年中造建ノ時ノ棟札アリ
其餘什質多シ宗祇ノ門人宗長連歌ノ詠草ア
リ
○法安寺同処ニアリ禅宗境内ニ庚申青面
金剛石像アリ相傳云近江国石工巧手ノ作ト
云

皆掛　坂ノ下駅ノ東ニアリ東街官道山林ノ間
ニ民居ス久都加計下訓ス○正税八十一石亀
山領十リ○屬邑楢ノ木寛文五年ヨリ分置処
十リ官道ニ居ス紫藤花ノ茶店アリ又此処一
里塚十リ○亀山畧記ニ鈴鹿椎現社神供田八
石先規ヨリ當村ノ内ニテ寄附スヽ云云今案ニ

関安藝守領主ノ時ノ例ニ拠レリト憶ヘリ村中ニ焼地藏ト云アリ由来詳ナラス烏丸光廣東路記ヨリ後寛文年中此処ニ桃林アリ春時ハ桃花爛熳タリシト云今ハ絶タリ又加藤盤斎カ哥アリ鈴鹿郡賦ニ載タリ猶考ヘシ本邑土産　草蓐　鍛冶炭　草履　青魚鮏　今茶店ニ售ル石工アリ製造ノモアリ

一ノ瀬　皆掛ノ東ニアリ山林ニ傍テ官道ニ民居ス伊知乃世ト訓ス、正税百せ三石亀山領ナリ一ノ瀬名義ハ本邑ノ北ニ一ノ瀬川アリ、水源ハ鈴鹿山ヨリ流出テ清滝川アリコシ川吾妻川ヲ經テ此ニ至リ八十瀬一流トナリ一瀬川ニ落又鹿伏兎川ト合又第一ノ瀬流ナル故ニ名リナルヘシ堯孝法師記一の瀬ト哥ニ詠リ旧名ト聞タリ然レ𪜈関安藝守信盛入道万鉄齊古券文ニ一ノ瀬ト記セリ一瀬川官道ニハ子カケ橋ヲ架ス本邑ニ毎年正月廿四日村民白膠木ヲ削リ杖ニ造リ新婚ノ家ニ至リ婦人ノ腰ヲ敲テ賀祝スル遺例アリ坂下駅ニモ同シ俗習アリトイヘリ

○筆捨山　一ノ瀬川ノ西官道ノ南ニアリ山麓ニ清流帯テ嶺ニ至リ矮松欝遏トノ数千株ヲ茂生ス奇石怪嵒処々ニ崎立セリ真ニ画圖ノコトシ俗傳云狩野越前守元信法眼此処ニ

憩ヒテ山景ヲ愛シ書写サントスルニ筆スル
ニ堪ス其筆ヲ投棄タリ本郡河崎村ノ産ニメ
近キアリ故ニ往々来リテ模写スルニ拠レリ
ト是ニ因テ名クト云妄誕ナリ狩野系圖云大
職冠藤原鎌足十二代孫二階堂遠江守武信後
裔狩野大炊助正信法名祐勢其子越前守元信
法名永仙永禄二年己未十月卒相川小田原人
也本朝通記云元信小名四郎二郎狩野正信之
長子正信姓藤原支別而相州小田原人也初正
信称大炊助仕将軍義政為近侍性好画業師周
文及小栗宗丹能得其趣小田原産ニメ本州ノ
人ニ非ス狩野氏ニ托ノ俗傳ナリ従フヘカラ

ス然レトモ樹嵓甚奇ニメ天造トイヘトモ屈曲盤
紆人工ヲ假メ愛観スヘシ旧名岩振山ト云或
ハ岩根ニ作ルハ非ナリ岩振ハ旧古ヨリ年ヲ
経ルノ義ナルヘシ此山脈ニ聯リテ大黒岩
蛭子岩　観音嵓　長モチ岩　女夫巖等近山
ニアリ各其形狀ノ似タルニ拠テ俗称メ名ク
処ナリ又轉ヒ石官道ノ南ニアリ又山腹ニ烏
帽子岩アリ狀ノ似タルニ拠テ名ク奇石多シ
筆捨山ノ麓ニ茶廓アリ青魚鮨ヲ行客ニ饗セ
リ四軒茶屋ト名ク
○権現山　筆捨山ノ前ニアリ元和中神宮御
上洛ノ時入御アリシ殿舎ノ遺跡ナリ土居石

垣ノ趾存セリ又立場見附ト云名モ遺レリ各
其時ノ用地ナリ

○朝日辨財天祠　一瀬川官道ノ橋ノ北傍一
里塚アリ丘圏ヲ塚ニ用タリ官道ノ傍ニ鳥居
ヲ建額ヲ揚ク石階ヲ登テ本祠西面ニ建タリ
此葦捨山茶店ノ本居神ト云或云祭神朝日郎
子今檢スルニ日本書記雄畧天皇十八年使物
部菟代宿祢物部目連將兵擊伊勢朝日郎誅伏
本朝通記云朝日郎嘗長射業驕其能不慕帝命
於是天皇遣菟代宿祢及目連以伐郎郎聞官軍
之至逆戰伊賀青墓郎子謂官軍曰郎手可中誰
人官軍皆恐菟代不敢進相持二日於是目連自
執大刀使築紫物部大斧手持楯進郎遥見之射
是徹斧手所持之楯及甲二重并入身一寸斧手
乃楯翳目連目連急進獲郎斬之ト注セリ或ハ
朝日郎ヲ誅メ後此地ニ埋葬シタル墓トモ云
ヘシ圏丘ノ形陵墓ニ類セリ其真ハ不得トイ
ヘドモ雄畧記擊伊勢朝日郎載テルニ拠テ其拠
ナキニ非ス考ヘシ北畠村親多氣窓蛍ニ橋姫
ヲ祀レル由ミエタリ然レドモ今朝日ト称スル
ニ意ヲ適スルニ及テ弁財天ハ後世村民ノ誤
リ祭ル処ト憶ヘリ後條琴橋ノ下併考ヘシ
○琴ノ橋　古昔禁廷ノ宝器ニ玄上及鈴鹿ト
称ス琵琶ノ絃ノ琴アリ即此鈴鹿川ノ橋板ニ

テ造レリト云ニ拠テ其橋ノ旧址ヲ探索スル
ニ諸説紛擾タリ或云今ノ鈴鹿明神ヨリ一町
許東官道ニ小流アリ石橋ヲ架スル処ナリト
云或坂下駅ノ東口ノ橋ヲ架スル処モイヘリ
或関駅ノ中ニアリ勢陽俚諺云坂下駅ノ櫛屋
ノ前ニ琴橋ト云アリ彼橋下ニ骨蓬草茂リ洪
水ニモ損亡セス何レ帝ノ御製ニヤ不知
桐のあれ橋よかなくれためしよや沓庵の川又川やとこ〳〳
勢陽雑記云
桐のあれ琴ふかなとの橋なれハ沓庵の川又川なれ
ト載タルヲ誤傳ヘタルナリ又云関ノ新処ト
中町ノ間北ヨリ南ヘ流行スル小川ヲナシ鈴

鹿川トイヘルハ水上ハ羽黒山ヨリ出ル云即
上世ノ街道ニメ鈴鹿川ト称スルモ宜ナリ鈴
鹿郡賦ニ関駅ノ所傳ニ新所ト中町ノ間ノ裏
明神ノ森ノ東ニ流小川ニメ箏ノ橋或桐ノ木
畑ト云小字アリ此地ナリトト云又今ノ駅路ヨ
リ南ニ農人ノ田畠ニ通スル径ニ小川アリ其
地ヲ宿屋ト字セリ今考ルニ此処ニ架セル処
ヲ真トスヘシ紹巴法印記ニ一ノ瀬弁天ノ橋
ナリ云此ハ拠アリ北畠村親多氣窓蛍云むら
し當國鈴鹿ノ橋板ふくつくりなる大和琴い
とめ〳〳敷ものて代〳〳の帝乃宮ものとはなれ
かなすぎい沓庵よ〳〳毎年もおろそう

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

禁秘抄云鈴鹿ハ累代宝物也毎年御神樂用之

浮象次第云和琴鈴鹿累代帝王渡物也百錬抄

云壽永二年七月廿五日平家黨類前内大臣已

下凡一族出奔西国天皇建禮門院同ク奉相具

内侍所神鏡神璽宝劔時ノ簡殿上御侍子玄上

鈴鹿皆以相具六波罗已下家同時放火洛中騒

動無物干喩頼盛卿一類留京都主上駕御車煖

政基道扈従即迂御六波罗泉亭建禮門院准后

駕列車轅摂政自途中廻轅逐電主上六歳同八

月五日條玄上出来大夫尉知康於路双見附即

進院路次事有御卜仝十日條云於殿上被行除

目義仲任左馬頭兼越後守行家任備後守践祚

以前除目人々頂申之平治勧賞於六波罗亭被

行之時五位藏人成頼云云鈴鹿笛笛出来云云

云此鈴鹿事平家物語平氏都落ノ條ニモ載タ

リ或建武年中吉野擾乱ノ後紛失スノ由敦有

卿記ニ見ユト云文治六年　俊成

雪玉集

是鈴鹿琴ト硯ヲ作リ合タリ硯ノ事蹟考据ス
ヘキアリ北畠村親記云ひゝ[illegible]

日本記第五元明天皇和銅三年正月甲子授無

位鈴鹿王交部王並従四位下仝第九聖武天皇
神亀三年春正月庚子天皇臨軒授従四位下鈴
鹿王従四位上仝第十一天平三年七月丁亥詔
依諸司挙擢式部卿三位藤原朝臣宇合民部卿
従三位多治真人縣守兵部卿従三位藤原朝臣
麿大蔵卿正四位上鈴鹿王左大辨正四位下葛
城王右大辨正四位下大伴宿祢道足等六人並
為参議仝第十一天平四年春正月乙巳朔甲子
正四位上鈴鹿王正四位下葛城王並授従三位
仝十一天平五年十二月辛酉遣二品舎人親王
大納言正三位藤原朝臣武智麿式部卿従三位
藤原朝臣宇合大蔵卿従三位鈴鹿王右大辨正

四位下大伴宿祢道足就縣犬養宿祢正男宜詔
贈従一位仝十二天平七年十一月乙巳知大政
官事一品舍人親王薨遣従三位鈴鹿王等監護
葬事其儀准大政大臣仝巻天平九年九月己亥
以従三位鈴鹿王為大政官事仝第十三天平十
二年春正月甲子行幸難波宮以知大政官事正
三位鈴鹿王正四位兵部卿藤原朝臣豊成為留
守仝第十四天平十四年五月丙辰遣知大政官
事正三位鈴鹿王等十人率雜工修繕仝第十六
天平十七年九月戊午知大政官事兼式部卿従
一位鈴鹿王薨高市皇子之子也今詮スルニ鈴
鹿川一瀬ト云ハ官道第一ノ湍瀬ニメ橋ヲ架
シ行客ヲ安ク陟シム処ニメ其餘八十瀬ニ河
梁ノ沙汰ナシ然ルニ前號ニ載ス一瀬朝日弁
天祠ハ村親記ニ拠ル件ハ第一ノ嶮処ニ架ス
橋ニ拠テ鎮護ノ神ヲ所置ニメ橋姫ト名ケ云
ヘ𪜈旧ハ雄畧記ニ載テル処ノ朝日郎ノ陵墓
ニメ後世ニ橋ヲ架スルニ及テ橋姫ヲ祀リ又
後ニ弁財天ニ轉訛ノ今ニ存ス処ナルヘシ鈴
鹿琴及硯世間ニ希有ノ宝器ニメ上世ノ事蹟
ハ存ストイヘ𪜈其形容モ知ヘキナシ材親在
世永正中ニ至リ鈴鹿社ニ摸形アリト記セテ
ル具後神社迁移或ハ火厄ニ罹リ今ニ至テ探
索ストイヘ𪜈更ニ知難シ

鈴鹿関　上世ニ三関ト称スルハ鈴鹿伊勢不破
美濃愛智越前此三処ナリ拾芥抄ハ相坂鈴鹿
不破ハ日本ノ三関也ト載タルハ後ノ称ナリ
式ニ鈴鹿関ヲ始テ置ルハ續日本後記ニ桓武
天皇ノ時ニノ後醍醐天皇ノ朝ニ停止ニ此
説妄ナリ日本孝德記大化二年置関墨防人此
取字ニ始テ建ラレタルヘシ中古ノ三関
ハ文德實録天安元年夏四月庚寅始テ置近江
相坂大石竜華等三処之関刻分配国司健児等
鎮守之唯相坂是古昔之旧関也時属聖運不回
門鍵出入無禁年代久シ矣而今国守正五位下
紀朝臣今守上請加ニ処関而更始置之也然レ
ハ相坂ハ大化中ニ所置ニノ天安中ニ大石竜
華ヲ増加ノ所置ノ始ナリ鈴鹿ハ前ニ創ノ大
化中ニ所置ナリ其證ハ續日本記第四元明天
皇和銅元年三月乙丑勅大宰帥大式並三関及
尾張守四人三関国守ニ人其考迄事カ及公廨
田ハ並准史生全和銅二年九月己丑遣従五位
下藤原朝臣房前于東海東山二道撿察関刻巡
省風俗仍賜伊勢守正五位下大宅朝臣金弓尾
張守従四位下佐伯宿祢大麿近江守従四位下
多治比真人水守美濃守従五位上笠朝臣麿當
国田各一十町穀二百斛衣一襄美其功績也是
伊勢美濃近江三国司褒田賜鈴鹿不破相坂三

関防護勲績ニ拠レリト謂ヘシ然レハ天安中
ヨリ已前ニ所置ヲ知ヘシ續日本記第五和銅
五年九月乙未禁取三関人為帳内資人仝第八
元正天皇養老二年五月甲辰禁三関及大宰陸
奥守国司儀杖取白丁仝養老五年十二月己卯
天皇崩平安城時春秋六十一遣三使固守三関
仝巻十聖武天皇天平元年二月辛未左京人従
七位湊部造君是无位中臣宮處連東人等告密
称正二位長屋王私學左道欲傾国家夜遣使
固守三関仝天平二年七月己卯停諸国防人仝
第十九孝謙天皇天平勝宝八年五月丙辰遣使
固守三関是聖武天皇崩御ニ拠リテ守ンム仝

巻廿五淡路廢帝天平宝字八年九月丙申以大
師正一位藤原恵美朝臣押勝為都督使幾内三
関近江丹波播磨国等習兵事仝九月乙巳大師
藤原恵美朝臣押勝逆謀頗泄高野天皇遣ヲ納
言山村王収中宮院鈴印押勝聞之令其男訓儒
麿等邀而奪之天皇遣授刀少尉坂上苅田麿將
曹壮鹿島足等而射而殺之押勝又遣中衛將監
矢田部老被甲騎馬且却詔使授刀紀舟守亦射
殺之勅曰大師正一位藤原恵美朝臣押勝並子
孫起兵作逆乃解免官位並除藤原姓字已畢其
職分功封等雜物宜委收之即遣使固守三関仝
巻廿六称徳天皇天平神護元年九月庚戌遣使

造行宮於大和河内和泉等国以欲幸紀伊国也
仝冬十月庚申遣使固守三関仝巻三十六先仁
天皇宝亀十一年四月辛酉伊勢國言今月十六
日巳時鈴鹿関西内城大鼓一鳴仝天應元年春
三月乙酉伊勢国言今月十六日午時鈴鹿関西
中城門大鼓自鳴三聲仝夏四月己丑朔左右兵
庫兵器自鳴其声如以大石投地也遣散位従五
位下多治比真人三上伊勢伯耆守従五位下大
伴宿祢継人美濃兵部少輔従五位下藤原朝臣
菅継越前以固関焉以天皇不豫也仝五月甲戌
伊勢国言鈴鹿関城門并守屋四間始十四日至
十五日自郷音不止其声如以木衝之仝十二月丁

未太上天皇光仁崩春秋七十有三六位已下
三人又遣使固守三関仝第三十七桓武天皇延
暦元年閏正月甲子因幡守従五位下水上真人
川継謀叛事露逃走於是遣使固守三関仝第四
十桓武天皇延暦八年夏四月乙酉先是伊勢美
濃等関例上下飛駅函国司必開見至是勅自今
以後不得輙聞焉仝秋七月甲子勅伊勢鈴鹿関
濃不破越前等国曰置関之設本備非常今正朔
所弛逼宇無外徒設関險勿固防禦逐使中外隔
絶既失通利之使公私往来毎致稽留之苦無益
時務有功民苦思革前弊以適変通宜其三国之
関一切停廢ノ所有兵器粮糒運收於国府自外

之官舍移建於便郡以上三関ト称スル八伊勢
美濃越前十り然ルニ日本後記巻二延暦十四
年八月己卯廃近江国相坂刻ト見ヘタり○文
德實録巻一嘉祥三年四月丙寅遣使於七箇佛
寺修四七日斉会如前日儀固近江国関使従四
位下右大弁藤原朝臣氏宗帰奏奉契仝月戊辰
固伊勢国関使右衛門佐従五位下藤原朝臣春
岡使散位従五位下藤原朝臣菅雄固美濃関帰
奏奉契此近江美濃伊勢等三関越前ナシ以後
准之○三代實録巻一天安元年八月廿七日己
卯文德天皇崩先是前二十六日遣使於伊勢近
江美濃国等賣勅符木契警固諸関散位従五位
下藤原朝臣菅雄外従五位下大蔡公宿祢此雄
並内舍人一人為伊勢使従五位上行丹波介坂
上大宿祢貞守散位従五位上毛野朝臣縄主内
舍人一人為近江使散位従五位下藤原朝臣真
道並内舍人一人為美濃使令下山城国司警護
宇治與度山崎道以東南西三方通路之街要也
是日宣告天皇崩之狀於山城国司及伊勢近江
美濃等使　仝十一月廿一日戊寅遣内舍人正
七位上藤原朝臣宗行佐伯宿祢春岑紀朝臣良
津賣勅符木契解諸関警是日夜分固近江国使
従五位上坂上大宿祢貞守帰奉契以正三位行
中納言源朝臣定為兼右近衛大将　仝廿四日

辛巳国伊勢国使散位従五位上藤原朝臣菅雄
帰奏奉契本書国美濃ノ由ヲ関如セリ○仝巻
二十貞観十三年九月廿五日壬子晦諸衛警固
令伊勢国近江美濃等國諸関警固勅曰今月廿
八日天皇大后崩事須遣使警固然時在秋収恐
妨農事況復牧宰具人宜停発使一委国吏勤令
警察仝巻廿二貞観十四年秋九月八日乙亥諸
衛解嚴罷兵庫左右馬寮監護使遣使遣内舎人
従六位下多治比真人国統従七位下當麻真人
春興正八位上藤原朝臣高尚等賫勅符木契解
伊勢近江美濃等国関警仝九日丙午国近江国
関使前丹波守従五位上坂上大宿祢貞守奉契
帰奏仝十三日庚辰国伊勢美濃国関使左京権
亮従五位下藤原朝臣生前伊豫権介従五位下
藤原朝臣房雄等奉契帰奏仝巻廿五云貞観十
八年十一月廿八日辛丑天皇有意譲位故出居
外宮遣使守内外要害之処以戒不虞従四位上
行右京大夫兼美濃守源朝臣覚散位従四位下
紀朝臣有常監護左右馬寮大蔵大輔従五位上
橘朝臣信蔭監護左右兵庫従五位上守民部大
輔藤原朝臣保則内舎人一人警固近江関散位
従五位上藤原朝臣有年内舎人一人警固伊勢
関前遠江守従五位下清原真人雅岳内舎人一
人警固美濃関各賫勅符木契一時馳趣仝巻三

十十二月乙丑遣使山陵奉荷前幣公卿於建禮
門前行事固近江関使従五位上安民部大輔藤
原朝臣保則奉木契復命仝廿五日戊辰固伊勢
関使散位従五位上藤原朝臣有年復命仝廿七
日庚午固美濃関使前遠江守従五位下清原真
人惟岳復命又同巻三十八元慶四年十二月五
日甲申遣散位従五位下賀茂朝臣晴奬近衛二
人於伊勢散位従五位上伴宿祢忠輔近衛二人
於近江国散位従五位上藤原朝臣諸房内舎人
従七位上伴宿祢宗永近衛二人於美濃国各賚
勅符木契固守関戸左右馬寮依例給使等馬是
大上天皇崩ス二拠レリ仝十一月庚寅諸衛解
嚴弓胡監護左右馬兵庫等遣使解三関之警固
内舎人正七位下藤原朝臣有蔭向伊勢内舎人
正七位下藤原朝臣良生向近江内舎人正八位
下藤原朝臣清範向美濃並賚轉勅符木契馳到
開門合符解固近江使散位従三位藤原朝臣有
蔭開近江関使内舎人正七位下藤原朝臣良生
等賚木契復命又同十四日癸巳是日固伊勢国
関使散位従五位下藤原朝臣房守解関使内舎
人正五位下藤原朝臣高階等賚木契復命又仝
十七日丙申固美濃関使散位従五位上藤原朝
臣諸房開関使内舎人正八位下藤原朝臣清範
等賚木契復命仝四十五元慶八年二月五日丙

申是日分遣使者固守内外要害之処遣散位従五位上源朝臣建於伊勢関中務少輔従五位下在原朝臣弘景於近江関、散位従五位下藤原朝臣有文於美濃関並賚勅符木契焉仝廿六日丁巳遣内舎人等賚勅符木契喚還固守三関使仝廿七日戊午固近江国関使中務少輔従五位下在原朝臣弘景還奏開闢状仝三月壬戌朔固伊勢関使散位従五位上源朝臣建解関復命又仝二月癸亥固美濃関使散位従五位上藤原朝臣有文解関復命又是八光仁天皇踏位ニ拠テ少り○百練抄巻十五寛元四年三月廿八日丁巳今日破立開関使権中納言公光卿参行之是後

嵯峨天皇即位ノ條ニ載ス　東鑑ニ元久元四月廿一日甲寅武蔵守朝政飛脚到着申云云月廿三日出京爰伊勢平氏等塞鈴鹿関所索嶮岨之際縦雖不遂合戰人馬依難通之廻美濃国仝廿七日入伊勢国云云　猶後條ニ載ス

勢陽五鈴遺響鈴鹿郡巻之二終

国立公文書館
National Archives of Japan

紙数五拾八枚

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan